



Title	王兵作品研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	朱, 偉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15212号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87167
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Wei_Zhu_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：朱 偉

主査 教授 応 雄
審査委員 副査 教授 阿部 嘉昭
副査 教授 権 錫永

学位論文題名
王兵作品研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

2000年代の初めに頭角を現した王兵の作品に関する研究は、決して多いとはいえない。中国国内では、王兵への関心が高いわりには、諸般の事情により、『鉄西区』が完成した時期に学術的研究が散見されたのを除いて、アカデミックな研究論文が多く見られない。欧米では、王兵映画に対する評価は高いが、学術的研究といえるものが直近まで稀少であった。昨年に *Wang Bing's Filmmaking of the China Dream: Narratives, Witnesses, and Marginal Spaces* と題する研究書が刊行されたが、その考察は中国の社会状況と王兵映画の空間表象についての記述に偏る傾向が見受けられ、作品論のアプローチをとっていない。いっぽう、王兵の映画が山形国際ドキュメンタリー映画祭で数度受賞したこともあり、とりわけ近年刊行されたアンソロジー、『ドキュメンタリー作家王兵 現代中国の叛史』に見られるように、日本における王兵映画の研究は高い水準を示している。ただ、日本語で書かれた王兵に関するモノグラフはいまだに未刊行である。本研究論文は、これまでの研究の諸成果を消化しつつ、単著に相当する分量で、多様な映画学的視点から王兵作品に関する考察を行なった意味で、王兵映画を研究対象とする有意義な論考を試みたものであるといえる。

幾つかの箇所では本論文が述べた知見の新規性が認められる。『鳳鳴——中国の記憶』をめぐる考察では、一方的な称揚を示す先行研究から距離を取り、被写体である鳳鳴が映画撮影以前に出版した自伝に記述された内容に照らし合わせ、カメラの前での鳳鳴の語り自伝本の記述再現の要素を持ったことを指摘する。論文のこの見解は、本作品を語るにあたってより重層的な議論が要請されることを促すきっかけとなるであろう。

また、『名前のない男』に関する論考では、これまで論じられることの少なかった

本作をめぐる、映像美に接近しつつもその直前でその実現を放棄する王兵の意図的な「中途性」をしるす映画表現を論じる箇所が、王兵作品の特異性を示すものともなる。このような指摘のオリジナリティも、王兵映画研究のこれからの進展に寄与するものであると認められる。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、本学位申請論文を着眼の多様性を軸に一定の新規性のある研究成果を遂げたものであると認める。一方、本論文に残る問題点についても具体的に指摘した。第一に、『鉄西区』を考察する第一章と第二章では、「廃墟」の表象と映像の「重さ」が論述されているが、この指摘を踏まえ、さらに「崇高」という美学概念に関連付けながら、より踏み込んだ議論の展開も可能であったように思われる。「美」とは峻別される「崇高」、この理論的視点を導入することによって王兵映画の特質を捕捉することを今後の課題として提案したい。第二に、作品論を行なうにあたり、先行研究を積極的に参照しているが、先行研究の知見から本論文独自の論述への展開がはっきりしない点の一部箇所に見られる。この点にも関連するが、一部の論述に若干の恣意性および記述の重複、錯綜も残る。第三に、各章・節のあいだで、論考の質・精度のばらつきが見られる。第四に、「事件」「物語」「映画性」「美」「機械性」などの本論文の主要概念の把握に章によっての不統一が見られ、撮影主体の無化によって主客対立の消えている王兵の撮影現場の特性が捨象されている不十分さもあった。また、参考文献作成や注記上の不備についても審査委員会は子細に指摘した。

審査委員会はこれらの問題点は主に、本論文の取り組む研究課題の斬新さに伴うものであり、学術的研究の蓄積が決して多くない現役の映画作家に関する研究に取り組む際に往々にして直面する困難に由来するものでもあり、王兵作品に関する総合的考察を多様な映画学的視点によって試みた本論文の学術的価値を妨げるものではないと認識する。口頭試問では、上記諸点についての指摘を受けた学位申請者は、理論構築上の弱点や、論証の過程に残る記述上の瑕疵、作中場面を分析する際に解消できなかった不備を認識しており、論考の精度を上げていく意欲を示した。これらの見解を踏まえ、本審査委員会は全員一致で学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。